

武井良明 『近世製鉄史論』

野 原 建 一

(1)

武井博明氏の遺稿集である『近世製鉄史論』(1972年 三一書房)が出てからすでに8年を経過している。それをいま、書評しようと思う。その理由として、つぎのふたつがある。すなわち、本書に対する評価が、いまだ十分展開されているとは思えないことが、そのひとつである。武井氏の研究対象が、近世の製鉄業、つまり、たたら吹製鉄業という限られた産業である、という理由だけであろうか。

いまひとつは、近世から近代への過渡期における産業史上にしめるたたら吹製鉄業の意義を武井氏の論点をふまえて問うてみたい。かつて、『特権的マニファクチュア』あるいは、『農奴主的マニファクチュア』⁽¹⁾という評価を受けた、たたら吹製鉄業のはたした役割をここで再検討してみようと思う。

注

(1) 藤田五郎『封建社会の展開過程』(『藤田五郎著作集 第4巻』収載 p.284~345)

(2)

さて、本書の構成であるが、これは遺稿を再編した渡辺則文、有元正雄両氏の手によるもので、武井氏の業績が見事に整理されている。それをつぎにかかってみる。

第Ⅰ部 生産構造

- (一) 近世後期における鉄穴経営と村落構造
- (二) 幕末期広島藩における一鉄穴経営
- (三) 文政・天保期広島藩藩営鉄山の一考察

第Ⅱ部 労働者

(一) 近世初・中期における鉄山労働者の性格

(二) 近世中・後期における鉄山労働者の性格

(三) 近世後期における鉄山労働者の性格

(四) 鉄山労働者の家族構成

第Ⅲ部 流通過程

(一) 大坂鉄座の意義

(二) 近世後期における鉄の流通

(三) 化政・天保期における鉄の流通

以上の篇別構成からわかるように、3つに大別される。武井氏の既発表の論文集ではあるが、「第Ⅰ部生産構造」と「第Ⅱ部労働者」は、主として1960~65年の時期に集中し、後年、すなわち、1965~70年にかけては「第Ⅲ部流通過程」に問題意識が移っている。

では、まず第Ⅰ部からⅢ部までの概要をつぎに述べておこう。

第Ⅰ部では、広島藩における幕末期の鉄山稼業の状態について述べている。そもそも、わが国で砂鉄を原料とした製鉄業が営まれはじめたのは、弥生~古墳時代頃といわれている。最初は、山地の傾斜地に設けて、谷風を利用した野鑪であった。室町時代に入って永代鑪となり、産業として定着するようになったのである。近世に入って、鉄製品が、社会的分業の進展にともなって、局地的市場圏のわくを突破して、全国的に出まわるようになった。そして、もっとも隆盛をみたのは、近世後期になってからであった。武井氏の研究対象が、もっとも盛んであった近世後期に集中するのは、けだし当然というべきだろう。

第Ⅰ部の(一)では、備中国を中心とした鉄穴経営の諸形態をみている。(二)と(三)は広島藩でいづれも

中国山脈系の砂鉄採取業の経営形態の分析である。鉄穴経営は、原料の砂鉄を採掘する権利の取得からはじまる。藩有林＝御鉄山は、領主の排他的権利の行使しようとするところである。したがって、領主の許可を得た農民＝豪農が、長期間の利用をする。つまり、土地所有を明白に基礎としない稼行権および得分権が強調されるのである（本書p.43～46）。

さらに、いまひとつ見のがせない点がある。それは、たとえ林野が藩有または、豪農の保有するところであろうと、砂鉄採取以外に厩大な薪炭林が必要なことである。すなわち、「鑑一カ所で使われる木炭は年間27万貫、その製炭に必要な山林は90町歩、鍛冶屋一軒で年間の使用木炭は小炭34石2斗、20町歩を必要とした」⁽¹⁾ という記述からもその点がうかがえる。

武井氏は、藩有林とそれ以外の林野における利用形態を分析し、豪農と村落のかかわりを豪農の「勘定帳」によりながら明らかにしていったのである。なお、第Ⅰ部には、補論としてつぎの二論文が収められている。

(一) 近世鉄山業の鞆について

(二) 中国地方砂鉄精錬場分布図

なかでも、(二)の「砂鉄精錬場分布図」は、寛政3(1791)年という近世後期の稼業状況を知るよい手がかりとなるろう。

さて、「第Ⅱ部労働者」には、氏がもっとも力点をおいた4つの論文が収められている。ここでの一貫した問題意識は、「(三)近世後期における鉄山労働者の性格」の一にしめされている。すなわち、「第一に、鉄山労働者の性格を把握するにあたって」は、「時期、地域による発展段階の差異」を顧慮すべきである。いいかえれば、「発展史的視角」に立つことが必要である。「第二に、農民出身の鉄山労働者の存在が指摘され」てはいるが、「農民層分解」とのかかわりあいの分析が不足している。「鉄山労働者の再生産」確立過程の究明がもとめられる。「第三に、いわゆる農民の鉄山労働」を「村落構造との関連において把握」されなければいけない（p.158）、以上の3点が氏の問題意識である。そして、この問題意識にもとづいて、出雲国、安芸国、そして伯耆国の鉄山労働者の分析がおこなわれている。現在の島根、広

島、鳥取各県の地方である。

武井氏は「鉄山労働者の性格」を規定する「鉄山労働者化」の「基本的コース」としてつぎの2点を指摘する。

(1)「農奴主的鉄山経営者」の支配下にある「下人」形態が、「鉄山労働者として専門化する」場合である。この型は、もっとも封建的色彩を濃くもつ人格的支配を定着させる。⁽²⁾

(2)周辺農村の「小農として自立し得なかった隷属農民の鉄山労働者化」または、借金等による隷属化のひとつの帰結としての鉄山労働者化、という型がある（p.136）。

以上の2点は、とくに近世後期に現出する型で、農民層分解がすすむなかで、多様な労働者の形態、たとえば、「鉄山出稼」「日雇稼」「村内奉公人」等の指摘がなされている。他方で、専門化の進展が、「技術労働者」を生むことも明示されている。

しかし、近世前期においては、「諸方のあぶれ者」的存在が、多数いたこともつとに指摘されているところでもある。ところが、それをもって鉄山労働者の特質とし、そこから鉄山における隷属関係を検証しようという方法に対し、武井氏は否定的立場をとるのである。すくなくとも、近世後期においては、「農閑稼業」としての不定期的稼業は、姿を消し、農村工業として、専門化した「労働者」が多数従事していたのである。そして、隷属的関係の例証とされる人格的支配さえ、幕末期にかけて、その度合が弛緩するという注目すべき現象さえみられるのである。⁽³⁾

武井氏は、以上の変化を「譜代→年季（質権奉公人的）→成捨（居消費奉公人的）」という図式にまとめ、「非技術的鉄山労働者」の展開を明示している。しかし、欲をいえば、その図式とさきの人格的支配の変化とをからませて説明するならば、鉄山業を単に「農奴主的マニユファクチュア」とだけ規定する方法に疑義が生じたのではなかろうか。つまり、近世前期の「農奴主的マニユファクチュア」が、近世後期に入って、新たな「マニユ」形態として評価できたのではないか、ということである。したがって、半封建的賃労働者の創出として、しかし、封鎖的生産関係の矛盾、相剋が具体的に今後、明示されていかねばならない課題とな

業を中心とした支配関係＝市場構造を図式化したものである。(A)この図の(A)系列は、近世後期に発展し、封建的桎梏が解体され再編されるが、(B)系列の「公権力によって保護された鉄山師の特権的支配領域」は、依然として旧体制のなかでしか存続できない生産構造をもつのである。

その理由の大きなもののひとつに、武井氏が「第I部」で指摘したような、自然的制約がある。すなわち、鉄穴における原料砂鉄採掘にみる低い生産性、さらに、燃料薪炭の生産性の低さがあげられる。歴大な量の薪炭消費は、広大な山林を必要とする。こうした諸制約は、他の諸産業、製糸業や織物業のように年中しかも一定場所に定置された稼業を不可能にするものである。また、製糸業、織物業が比較的、小農の生産構造を基盤とし、問屋制との桎梏と対立するのに対し、たたら製鉄業＝鉄山業の生産構造は、豪農と公権力との共生関係にみずからの基礎を築かざるをえなかったのである。したがって、幕藩体制の解体も一方で、領主制の存続をもとめる、という矛盾を内にもつため、維新変革過程において、領主制が否定されると、鉄山業の生産構造もまた、否定される必然性にあった。

ところが、市場構造はどうかというと、武井氏が「第III部」で指摘したように、鉄市場は、幕藩体制の流通を解体し、大坂特権商人にさえ強い圧力をかけ、全国市場への展望をきり開くほどに発展したのである。製糸業が輸出にその展望をみるのに対して、国内的需要のたかまりにおいて「全国廻船」をみる製鉄業とその市場構造の違いが指摘される。

また、労働力市場においても、製糸業が安価な女子労働者を主軸として、比較的近県から得やすいのに対し、鉄山業は、男子労働者が主軸で、しかも特別の技術を要し、近村内という限られた地域性から労働力を得る、という違いがある。

明治期に入ると、この相違は新たな相剋をもたらした。それは、安価な外国産鉄の大量輸入であった。明治期の鉄需要は、単に民需にとどまらず、「軍事機構確立」⁽²⁾のための国家的要請下の需要でもあった。しかし、たたら製鉄業には、その要請に応えるべき生産力を十分にもちあわせてはいなかった。「洋式製鉄業」が導入されるゆ

えんである。⁽³⁾ 在来産業としてのたたら製鉄業が、完全にその姿を消すのは、さらに後年、昭和初期の恐慌時である。中国地方の鉄生産高が、釜石鉾山田中製鉄所の産高においこされたのは、明治27(1894)年であり、それまでは、国内産高で1位をしめていたのであるが、「洋式」との生産力における格差が、衰退の要因にあげられる。

このように近世後期から近代にかけて発展した製鉄業は、資本制的生産様式をとりうるほどに成熟したマニュ形態をとりえず、未完成のマニュファクチュアとして終結する。しかし、武井氏が指摘した鉄商品市場構造の発展は、たたら製鉄業の生産構造とはむすびつかなかつたが、明治期に入ってから「上から」の産業資本創出過程と結合し、資本主義形成の前提条件をつくった、という意味で評価されるのである。

したがって、幕藩体制下の種々の市場規制、または市場統制はあったが、幕末期には、かなりの程度、全国的市場の展開がみられ、これが明治期に入ってから資本制的生産様式確立の基礎となったのである。武井氏の遺稿集『近世製鉄史論』はそうした展望と問題点を提起した画期的な労作集といえる。氏の夭逝が惜しまれてならないのは、氏によって、たたら製鉄業の意義が産業史、または資本主義発達史のうえで検証されたであろう、ということにもよる。いづれにせよ、本書が問い遺したものは重い。

注

- (1) 拙稿「たたら製鉄業の生産構造」(『現代日本産業発達史 鉄鋼』) 鉄山業とたたら製鉄業は、一般に同義で使われる。鉄山業という言葉には、歴大な山林、鉄穴経営という面がとくに強調されているが、原料採掘、燃料生産から鉄製品完成までの一貫経営、という意味では、たたら製鉄業と同じである。
- (2) 山田盛太郎『日本資本主義分析』
- (3) 旧来のたたら製鉄業に洋式技術を導入し改良の試みが、広島でおこなわれた。飯田賢一「広島鉄山の改良」(『現代日本産業発達史 鉄鋼』)しかし、この試みは、十分な成果をあげないままおわってしまった。